

様 式 C - 1 9、F - 1 9 - 1、Z - 1 9 （共通）

科学研究費助成事業

研究成果報告書



令和 5 年 5 月 25 日現在

機関番号：33902

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13129

研究課題名（和文）カリフォルニア文学の場所表象における作家・土地・観光産業の関係性

研究課題名（英文）The Dynamics of Writers, Place and Tourism in California Literature

研究代表者

菅井 大地（Sugai, Daichi）

愛知学院大学・教養部・講師

研究者番号：20825666

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000 円

研究成果の概要（和文）：アメリカ西部、特にカリフォルニアは観光産業と密接に関連する場所である。そのような場所と観光産業の関係性が、いかに文学作品に影響を与えているのかという点を考察するのが本研究の主眼であった。また、場所（環境）と人間の関係性が文学においていかに捉えなおされ、それらが西部観光振興の言説とどのような関係にあるかを解明することも同時に目指した。カリフォルニアの場所を前景化する作品は、西部の環境をロマンチックに提示する観光の言説とは一定の距離を置いている、ないしは観光の言説に対して批判的な視座を提示していることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アメリカ西部を巡る観光振興言説の背景には、西部の自然環境をロマンチックに提示する環境思想がある。そのような観光の言説に対して、西部の場所を巡る文学作品がいかに応答したのかという点について、環境批評の言説を援用しつつ、文学・環境・観光の三点の関係性を明らかにすることが本研究の主題であった。これまであまり関心の払われなかった、場所を巡る文学と観光産業の関係性を読み込むことで、アメリカ西部、特にカリフォルニアを扱う文学作品において観光の言説が少なからず影響を与えている点を解明したことが本研究の意義である。

研究成果の概要（英文）：The American west, California in particular, is a place closely related to the tourist industry. The main focus of this study was to examine how the relationship between the place and the tourist industry influences literary works of California. At the same time, this study also aimed to elucidate how the relationship between the place (environment) and humans is redefined in literature and how it relates to the discourse of the tourist promotion of the West. It became clear that some literary works of California are at distance from, or offer a critical perspective on, the tourist discourse which romanticizes the environment of American west.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：カリフォルニア文学 環境批評 場所の感覚

1. 研究開始当初の背景

本研究は、カリフォルニア州中部の海岸地域ビッグ・サーを扱う文学作品を環境批評の観点から分析することで、ビッグ・サー言説における作家・土地・観光産業の三要素の関係性の解明を目指す。ニューディール政策の一環として土地開発が進んだ結果、ビッグ・サーは豊かな自然環境を売りにする観光地と化した。ビッグ・サーの観光産業の背景にはアメリカの環境思想があり、ビッグ・サー言説と環境思想が密接に絡み合いながらビッグ・サーという土地表象を形成していると考えられる。しかし、これまでの環境文学研究では、作家と環境の関係性が重視されており、そこに観光産業が如何に関わったかということにはあまり関心が払われていない。そこで、本研究はビッグ・サー文学における作家・土地・観光産業という三者の連関によってビッグ・サー言説が形成されているということを明らかにする。

カリフォルニア州を主な舞台とする文学(以下、カリフォルニア文学)に関するこれまでの研究によれば、カリフォルニア文学はフレデリック・ジャクソン・ターナーのフロンティア学説と密接な関係にあるとされる。例えば、カリフォルニアはアメリカ人にとってエキゾチックな冒険を提供する土地であり、そうした場所における「新たな経験」と格闘することがカリフォルニア作家の使命とされる。つまり、男性中心的な西部開拓のイデオロギーがカリフォルニア文学には色濃く表れていると言われることが多い。さらに、カリフォルニア文学は、カリフォルニアという場所をエデンの園として捉え、それが都市の拡大によって失われたという「喪失の感覚」を描き出すものであるとも言われる。これらのカリフォルニア文学研究を総合的に概観すると、カリフォルニア文学の多くは、自然と対峙するというフロンティアの経験を通して楽園を回復できるという幻想を、その土地に仮託しているという指摘が成り立つ。

アメリカ西部が歴史的に環境を巡る論争に深く関わった土地であることに鑑みても、カリフォルニアという土地を巡る言説は、アメリカにおける環境思想と密接なつながりを持つ。アメリカの環境思想には「自然礼賛型」と「技術・自然調和型」の二つの潮流が存在する。西部の荒野と対峙し、そこに楽園の幻想を見出すという図式は、カリフォルニアの豊かな自然と対峙する経験を称揚するという点において「自然礼賛型」であると同時に、西部開拓を通して自然を手なずけて楽園を(再)構築することを目指すという点において「技術・自然調和型」であるともいえる。例えば、「自然礼賛型」にみられる原生自然(ウィルダネス)への欲望は、新大陸入植当初の荒野と対峙する力強い男性性を現代の自然体験の中で再現しようとする行為と同義である。また、「技術・自然調和型」に関しては、科学技術の発展によりウィルダネスを征服することで、中間的な風景 機械と自然が調和した牧歌的な風景 を獲得することができるというヴィジョンが存在する。

では、アメリカの環境思想に対して、カリフォルニア文学は如何に応答してきたのだろうか。環境に対する意識が高いと言われるカリフォルニアだが、カリフォルニア文学はアメリカの環境思想を擁護する傾向にあるのか、それとも疑問を呈するのか。これは人間と環境の連関をカリフォルニア文学がどう捉えるのかということに関わる問題であり、場所を巡る文学的表現と環境思想の結節点を探求することにつながる。カリフォルニア文学を環境文学として読み直すことで、人間と土地との関係性の言説が如何にして構築されてきたのかということを明らかにしたい。

しかし、カリフォルニアという括りは広すぎるきらいがある。1991年に Gerald W. Haslam はカリフォルニア文学で扱われる土地を五つの地域に分類したが、これを参照しつつ、より狭い地域に着目した方が、文学と土地との関係性が浮き彫りになるのではないか。そこで本研究では、カリフォルニア文学の中でも特にビッグ・サーと呼ばれる地域に関する言説を詳細に分析し、ビッグ・サー文学とアメリカの環境思想がどのように連携(ないしは反発)しながらその土地の物語を構築してきたかを考察する。というのも、ビッグ・サーという地域は豊かな自然環境を観光産業の謳い文句にしているほどに、「自然礼賛型」環境思想を下敷きとした言説が多く見られる地域だからである。

2. 研究の目的

環境思想とその土地を巡る言説を考察するうえで、ビッグ・サーという地域は重要である。ビッグ・サーという地域は、地理的に入植が困難であったことから人口が比較的少なく、文明から隔絶した感のある原生自然が多く残る土地である。またそこは20世紀初頭から前衛芸術家たちが移り住み、「伝統からの逃避」あるいは「非体制的な価値観の苗床」として象徴的な意味を持ったという。さらに、このように原生自然が多く残る土地は、上述の「自然礼賛型」の欲望を充足させるための機能を果たす。一方で、1937年にニューディール政策の一環として州道1号線が開通して以降、ビッグ・サーは全米から多くの観光客が訪れる観光地としての機能も果たしている。こうした観光産業の側面からも、ビッグ・サーという「手つかずの自然」が、ウィルダネスを希求する欲望を充足させるために一役買っていることがうかがえる。

こうした歴史的背景を考慮すると、ビッグ・サーを巡る言説は、単純に作家と土地との関係性を記録するにとどまらないのではないかと予想できる。大恐慌期の労働力需要拡大のために政

府主導で進められたインフラ整備が結果としてビッグ・サーを観光地化した側面がある。このことから、ビッグ・サー開発の背景に「自然礼賛型」だけではなく「技術・自然調和型」の環境思想も読み取ることができる。また、ニューディール政策の一環である芸術振興(Federal Writers Project)によって各州のガイドブックが作成され、土地ごとの民話などが発掘されたという背景も見逃すことはできない。つまりビッグ・サーは、芸術家(作家)、土地、政府による観光産業振興という三つの要素が複雑に絡み合って表象されるに至った土地であるといえる。

人間と環境との関りを前景化する環境文学の研究では、作家と環境との関連性が重視されているため、それらの作品における環境表象が、観光産業による土地言説の形成とどういう関係にあるのかということについてあまり関心が払われていない。本研究の目的は、これまでの環境文学研究を踏まえたうえで、ビッグ・サーという土地表象がアメリカの観光産業および環境思想と複雑に絡み合いながら形成されるに至った力学を解明しようとする点にある。また、これまでの地域主義文学研究と環境文学研究を横断しつつ、観光産業という第三項を措定してビッグ・サー言説を分析することにより、土地言説形成過程の複雑性を提示することを試みる。

3. 研究の方法

本研究は、作家・土地・観光産業の三要素がそれぞれ複雑に絡み合ってビッグ・サーという土地の言説を形成してきたことを明らかにする。また、こうした土地の言説がアメリカの環境思想とどういう関係性にあるのかということも加えて検討する。そのため、本研究では、カリフォルニア文学、なかでも特にビッグ・サー地域を背景とする20世紀の小説を取り扱う。具体的な作品としては、Robinson Jeffersの1920年代の詩における自然環境の表象、Henry Millerの*Big Sur and the Oranges of Hieronymus Bosch*(1957年)、Jack Kerouacの*Big Sur*(1962年)、Richard Brautiganの*A Confederate General from Big Sur*(1964年)などが挙げられる。

4. 研究成果

Lonely Planet や *Moon* といった代表的観光ガイドブックにおける、ビッグ・サーの紹介文には、上記の作家の名前がしばしば挙げられ、これらの作家にインスピレーションを与える土地としてビッグ・サーが紹介される。さらに人里離れた風光明媚な場所として、パストラルを思わせる言説が散見される。こうした言説は伝統的にアメリカ西部イメージのステレオタイプと密接な関係があると考えられる。John A. Jakle は観光学に関する研究書 *The Tourist: Travel in Twentieth-Century North America* (1985年)において、カリフォルニアという場所がパストラル・イメージと結びつけられる傾向にあることを指摘している。Hal K. Rothman は、*Devil's Bargains: Tourism in the Twentieth-Century American West* (1998年)の中で、アメリカ西部観光がアメリカの国家的アイデンティティ形成に重要な役割を果たしてきた歴史的背景を踏まえつつ、ロマンチックな西部イメージが観光産業の根幹にあると述べる。さらに、アメリカ西部観光史の代表的研究書である Marguerite S. Shaffer の *See America First: Tourism and National Identity, 1880-1940* (2001年)は、西部イメージが自由や民主主義の概念と強く結びつきながら形成されてきたことを指摘する。そして、観光学研究の代表的研究書である John Urry の *The Tourist Gaze 3.0* (2011年)は、人口の少ない自然環境を求める人々の欲求を「ロマン主義的なまなざし」と呼んでいる。すなわち、アメリカ西部、特にカリフォルニアという地域は、こうしたロマン主義的なまなざしの言説に彩られた地域である。

しかし、カリフォルニア文学、ならびにビッグ・サー文学には、このような観光言説が内包するロマンチックな西部イメージを覆す場所表象がしばしば現れる。ロマンチックな自然環境を求める人々の欲望を喚起する西部観光言説と相反する場所表象について、筆者はすでに学術論文でいくつか検討を加えている。例えば、必ずしも観光を主題化するわけではない Upton Sinclair の小説 *Oil!* を、人間と非人間(ノン・ヒューマン)の関係性から読み直すことで、この作品がパストラルの不可能性を示唆していることが明らかとなる。20世紀前半にすでに自然/文明の二項対立が成立しえないことを暗示するこの小説は、西部観光言説が寿いできたロマンチックな西部イメージに対抗する言説として解釈されうる。また、Richard Brautigan の *A Confederate General in Big Sur* においては、必ずしもビッグ・サーという場所が物質主義的社会から逸脱することのできる楽園として描かれているわけではないことが確認される。こうした場所表象から、反順応主義的ユートピアとして喧伝されるビッグ・サー観光言説に対して、Brautigan は抵抗を示していると考えられる。さらにビッグ・サー地域を中心に扱う Jack Kerouac の自伝的小説 *Big Sur* においても、作中の自然描写、および Kerouac の精神的荒廃と彼のフレンチ・カナディアンとしてのアイデンティティを関連付けることにより、ケルアックの描く崇高な自然がアメリカ的ウィルダネスの範疇から逸脱していることがわかる。原生自然を求める観光客の欲望の受け皿となってきたビッグ・サー地域の自然環境が、必ずしもロマンチックな言説に沿うものではないことが示唆されている。このように、文学作品に表れる場所表象は、観光産業言説に対して明示的に言及するか(もしくは観光を主題化するか)否かにかかわらず、ロマン主義的なまなざしに抵抗するような言説を産出してきた。

アメリカ西部観光言説から零れ落ちる場所表象の一つとして、その土地の定住者の視点からの記述があげられるだろう。これについては、Robinson Jeffers の長編詩“Cawdor”と Linda Sonrisa Jones の *Romancing the Sur* のビッグ・サー表象を比較しながら検討を行った。特に両者に表れる山火事と避難の物語は、ロマンチックな観光言説が言及しない場所言説であろう。カリフォルニ

アと山火事は密接な関係にあり、とくに近年ではその勢いを増していることがカリフォルニア森林防火局の統計からも明らかである。こうした「火」と人間との関係性を Stephen Pyne の提唱する「火新世」という概念を援用しつつ、上記の作品に表れる山火事表象を読解した。人間活動が地球に与える影響が地層に刻印されるようになった時代を指す「人新世 (Anthropocene)」という概念があるが、「火新世」はこの概念の派生と考えられる。少なくとも現代は、人間による「火の使用」が環境に与える影響、または火に起因する環境からの影響に無自覚でいられない時代である。山火事という非常事態は日常の脆弱性を暴き出し、人間が大きな生命循環の流れの中に逗留しているにすぎない存在であることを示唆する。こうした日常の脆弱性こそがビッグ・サー文学の特質であり、そこで描かれる山火事は、「火新世」における人間と場所の関係性を問い直す。

特に Linda Sonrisa Jones の作品から明らかになるのは、山火事という非常事態から新たなコミュニティが立ち上がるという利点である。避難先で他の住民と対話することで、他者の日常を知り、同時に、互いに生き延びるという目的のみに基づいて時間を共有する。このことが共感関係を生じさせ、より密接な人間関係、そしてコミュニティ・スピリットをはぐくむと Jones は述べる。さらに本研究と直接的に関連するのは、Jones が観光産業に言及している点だ。災害によって、幹線道路が閉ざされて観光客がいなくなったビッグ・サーは静寂に包まれたという。そこで Jones は静寂のなかでその土地とつながり、太古からのその場所の歴史に想像力を働かせる。これが彼女のネイチャーライティングの想像力の源泉の一つである。Jones の筆致にはアメリカ西部観光言説が喧伝するロマンチックな自然描写と共鳴する部分があるものの、その成立過程はやや複雑であることが看取できる。災害によって観光産業が一時的に停滞した結果、Jones はより一層土地との結びつきを意識する。すなわち、そこに住まうものですらも、逗留者にすぎないという環境に対する謙虚な意識が醸成されることになる。

アメリカ西部観光言説と文学作品における場所表象の関係性については、おおむね相反する関係性があるといえるかもしれないが、Jones 作品のように観光言説と共鳴する自然観も表れていることを考慮すると、観光言説と文学における場所表象の関係性は複雑な力学を内包している可能性がある。作品論および作家論の観点からいくつかの研究を遂行してきたが、より大きな見地から観光と場所表象の関係性に関する理論的考察が必要となるだろう。これについては未だ不十分であるため今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 菅井大地 | 4. 巻 44 |
| 2. 論文標題 The Capitalist Scheme Subverting the Hope for Solidarity in Of Mice and Men | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Steinbeck Studies | 6. 最初と最後の頁 13-27 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 菅井大地 | 4. 巻 21 |
| 2. 論文標題 偽装される故郷 Dog Soldiersを経由して"Soldier's Home"を読む | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 ヘミングウェイ研究 | 6. 最初と最後の頁 81-91 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 Daichi SUGAI | 4. 巻 39 |
| 2. 論文標題 Petro-Ecology in Upton Sinclair's Oil!: An Illusion of Pastoralism | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 言語文化研究 | 6. 最初と最後の頁 1-22 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 Daichi SUGAI | 4. 巻 31 |
| 2. 論文標題 Coexistence with Environmental Exclusion in Cynthia Kadohata's In the Heart of the Valley of Love | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 松山大学論集 | 6. 最初と最後の頁 81-101 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

| |
|----------------------------------|
| 1．発表者名 菅井大地 |
| 2．発表標題 民主主義的個人の位相 群衆・周縁・エコロジー |
| 3．学会等名 第37回日本アメリカ文学会中部支部大会 |
| 4．発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1．発表者名 菅井大地 |
| 2．発表標題 The Octopusにおける超自然的"FORCE" 人新世の文学としてのアメリカ自然主義文学 |
| 3．学会等名 中・四国アメリカ文学会第49回大会 |
| 4．発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1．発表者名 菅井大地 |
| 2．発表標題 Blue Humanities Wild Blue Media (2020)を読む |
| 3．学会等名 第33回エコクリティシズム研究学会ワークショップ |
| 4．発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1．発表者名 菅井大地 |
| 2．発表標題 Emotions Floating in the Air: Affective Transmission across Mortal/Immortal Breaks |
| 3．学会等名 Association for Asian Studies 2022 Annual Conference (国際学会) |
| 4．発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1．発表者名 菅井大地 |
| 2．発表標題 戦場としての故郷、故郷としての戦場 Dog Soldiersを経由して"Soldier's Home"を読む |
| 3．学会等名 日本ヘミングウェイ協会2019年5月ワークショップ |
| 4．発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1．発表者名 Daichi SUGAI |
| 2．発表標題 Steinbeck's Tide Pools, or Poetics of Time |
| 3．学会等名 Blue Humanities: Anglo-American Literature and the Aquatic Environment (国際学会) |
| 4．発表年 2020年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|----------------------------------|----------------|
| 1．著者名 辻和彦・浜本隆三 | 4．発行年 2022年 |
| 2．出版社 明石書店 | 5．総ページ数 284 |
| 3．書名 非日常のアメリカ文学 ポスト・コロナの地平を探る | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

| | | | |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|